

釋迦と親鸞と吾人と

一部三年哲 宮 田 正 明

第一章 序として書き終へた時の心持を

聖親鸞と現代と言ふ題のものに吾人が従來研究し來つた種々の問題を發表する考へで先づ親鸞の背景として釋迦及釋迦入滅より親鸞に至る二千余年間の佛教概畧とに就て研究する心算であつた、所が第二第三章の背景となる可き部分が余り長くなつた爲めに止むを得ず右の如く改題したわけである、若し數量に限りないのであつたならば吾人は遺憾なく初志を貫いたかも知れんけれども實際が許さなかつた、第二第三章もあれで随分思ひ切つて削減したので吾人としてこれ以上の省略は出來ぬ。

それから第五章に於て今少し吾人を發表する考であつたがさう行かなかつたのが残念である日頃常識派の達人が吾人の生活を不思議に思つてゐるので吾人は面白い現象だと思つてゐる、無論吾人が吾人を發表してみやうと思立つたのは常識派の人等に與ふると言ふやうな消極的な意味からではない、小なる若い哲學者としての積極的意味からである、後日機會を得て、吾人が佛教からと現代からと學び得た世界觀人生觀宗教觀藝術觀を「吾人の發表」として發表するであらう、

第二章 釋迦研究

世界の四聖と言ひ或は七聖と言ふ中にも吾人は釋迦を第一歩者と見る、それは何んと言つても人格が大きい計りでなく至極圓滿に發達してゐるからである、單なる感情の人でなく單なる奇蹟的な人でなく又單なる理

智の人でない、彼は實に佛と言はる可き程圓滿充實の人格である、そして彼の道程、彼の修道、彼が人生に對する原始的問題彼の傳道方法彼の生活狀態、彼の死、これ等が凡て吾人をして彼を第一歩者と叫ばせる、殊に、彼の死に至つては實に永生の勝利者たる眞面目を赤裸に見せてゐる、生死解脱者たるの風光を眞に見せてゐる、彼の死は大平安の死である、眞に大宗敎家たるの光榮ある死である、而かも當さに息絶わなうとするも尙道を説く、人一度佛遺敎經を讀みて大釋迦の遺言と合せて彼の死を見て誰か敬畏の歎に打たれざるものぞ。

釋迦を研究せんとするに際して是を歴史的に考察する時頗ぶる困難を感じる是は紀元前の事になれば敢へて釋迦の場合のみでないが殊に釋迦の如き宗教的偉人に至りては後世の人は是を尊崇する余り、余りに實らしからざる幾多の潤飾を施してゐるからである從て是を歴史的に考察する事は容易でない、且又吾人の今の論文には歴史的の研究は必ずしも重大なる意義を有しない、故に吾人は釋迦の宗教の内容を抽象的に見て行ふと思ふのである、姉崎博士の根本佛敎と井上哲博士の釋迦牟尼傳とを一讀して貰ひたい、

a. 哲學的傾向

釋迦はクリストの如き奇蹟のやうな偉人ではない、彼は早くから多くの師を興へられて着々修養して行つた、非常な理智と強い意志と高調的な感情とを合せ有せる普通の人間が修道の結果遂に理想に到達し得たと言ふに過ぎぬ、彼の道程は苦しく長かつた、クリストを流星とすれば釋迦は太陽である。漸次に序を歩んで遂に輝き順を歩んで傳道し時を待つて死んだ、一人の求道者に對しても彼は機の熱するを靜かに待つた程に氣長であつたが併し其程迄に眞宗敎に徹底してゐた、眞信仰がさう容易く個人の胸中に完成するものでない、事

を知り且つ自己に許されたる力を知つてゐたのである。彼の理智は極めて深く彼の哲學的思辨は敬畏す可きものであつた、當時婆羅門教が傳へた古代印度の哲學を初め六十二種の哲學を説に彼は通曉し終つて尙より以上を求めて煩悶した、後に彼は傳道するに當つても求道者の持てる哲學を破壊するよりは寧ろ彼をして其を善用せしめた、これらはソクラテスあたりとよく似てゐる、從て彼の教説中には淺薄な哲學もあれば深遠なものもある、唯心論もあれば唯物論もある、其等は凡て釋迦に依て攝理されて其の場合の第二人稱即佛家の所謂對告衆のために人生解決の光明となつたのである。如何なる種類の哲學を押し立てて來ても凡て其等が釋迦に依て攝理されたと言ふ事は彼の人格の大なる所以もあらうが又彼の哲學的素要の立証ともなる、故に彼の教説は其中に哲學の激流が轟々と渦巻いてゐる、前田博士が佛敎經典を讀んで行く内に三度變化する最初は只神話的に見れば次の時期に至ると哲學的に見れば、第三期に入りて始めて所謂宗教的に見ると言はれたが實際佛敎經典が哲學的嗜好の好材料として讀まれる時代は誰にもあるであらう而して此時期に於ては其の哲學的含蓄の遠大に驚くにちがいない、オイケンやベルグソンの哲學が哲學として學者間に何れ丈けの權威であり得るか大に疑問であるが大乗佛敎の哲學思想に比べては近代の東西洋の哲學は何んでもないと言ふやうな事を日本や獨乙の學者の筆に見るのである、寛博士は第二十世期の問題は印度哲學の復興であると言つた、此等は吾人が後日専門的に研究す可き重大なるものゝ一つである。

要するに印度と言ふ所謂梵の思想の發達した哲學的民族の中に生れて遂に其民族を靈的に征服して一大王國を建設した釋迦が理智に於て偉大であり従つて釋迦に依つて生れた佛敎が著しく哲學的であると言ふ事な偏見なき研究者の等しく認むる所である、無論宗教が哲學的である事の價值如何は今論じてはゐない。

b. 個人的傾向

前述の如く佛教思想が著しく哲學的思索的であると云ふ事の當然の歸決として佛教思想は個人的である。釋迦の頭が漸く哲學的に深くなつて來ると此の人間の原始的問題は何うしても個人々々の全負擔である事に驚かねばならなかつた、曠い世の中に只獨り立ちてゐる自己自身の孤獨に當面せざるを得なかつた。三千の宮女は淨飯王の命を受けて後の釋迦たる皇太子をどりまいて媚を呈した、春の花園秋の觀月。侍臣は常に彼に仕へた、併し彼の理智は事物の皮相を突破して其の眞底に迄彼を導いたを以て此時彼が當面した事物の眞底其所には久遠の孤獨があつた事々物々は凡て己れ自身の運命を負ふて己れ自身の道をゴロ／＼と轉つて行くのであつた、彼は野獸の悶死するを目撃し人間のあわれなる最後を目撃したを以て其等を見るにつけてもいよ／＼彼は『一人／＼の生』に驚き泣かざるを得なかつた。彼は獨生獨死獨去獨來と叫んだ而かも彼の冥想か其の何れより來り何れに向て去らんとするかを追求するに至つて獨去獨來の哲學的孤獨觀は絶大の恐怖と苦痛とを伴ふに至つた。加ふるに彼は陰氣で彼の感情は事物の哀調のみを求め彼の理智はさわがしい皮相の音樂に醉ふ事を許さなかつたかくて彼は泥濘の牛がもがけばもがく程沈む如く益々深く孤獨の谷に落ちて行つた、故に彼の思想は深く探ぐれば探ぐる程個人的で哲學的孤獨觀の恐怖と悲哀に満ちてゐる事が解る、例せば彼が國家思想をはなれて世界的人生觀に進んだのも當時の四階級の制度を打破して四性平等を稱へたのも決して政治的の意味や又は單なる慈悲の意味からではない實に彼の哲學から來た當然の要求の發表であつた個人本位の立場からの四姓の解放であつた、

c. 出世間的傾向

己に問題に觸れたる釋迦に個人的の思想が胸に根を下すこともはや父母國家妻子を顧みる暇はなくなつた、彼は廿九才。十二月八日夜半靜かに宮城をぬけ出て車匿をつれ白馬にまたがつて淡き月影を歩み廣い野を渡つて夜明け頃苦行の森にのがれた、其所で彼は一途に生の解決死の解脱に精進したのである、彼は妻子の愛す可きものである事も父母の老を見守るべき事も國民の政治的平安を保護増進する事の價値も彼の理智に照らして知りぬいてゐたのであつたが併し自己自身の原始的問題が解決されない限り何れの施設も活動も決して徹底せるものでなく永遠の意義と光榮とを有するものでない事により以上の覺醒を持てゐたのである、彼は實に自己の根本的改造のために、生死と言ふ原始的問題を解決するために、自己自身が先づ永久の勝利者徹底者となるために、阿耨多羅三藐三菩提を成熟するために一切を投げ捨てた所の覺醒の強者であつた、國家を捨て位を捨て父母を捨て妻子を捨て友を捨て名譽利達淨世の勝利を一切捨てた、昨日の皇太子は今日の苦行林の一沙門となつた、且彼は父母妻子とつながる本能的慾愛は修道上の惡魔と見た、是は彼の哲學的個人主義から出たとも見られ又實際上愛慾情慾に妨げらるゝ修道者の苦痛から出たとも見られる、性は親鸞に至つて解放されてが釋迦は決して解放しなかつた、三界流轉中 恩愛不能斷 棄恩入無爲 眞實報恩者 とは蓋し釋迦中心の叫びであらう。彼は先づ三界流轉の解決なき不自由なる囚はれの自己、暗より暗にさまよふ自己に泣いた、そして其の解決なき所以我が生の動亂多き所以は未だ贖はれざる愛恩の斷ち難きにあると思つた故に父母妻子の不徹底なる獸性に富める恩愛を投げ打つて大理想界に徹底の勝者とし新生するこれこそ眞實なる報恩行者であり人生熱愛者の最後の道であると考へたとして彼は是を實行した、かくてなされたる彼の出家遁世はやがて佛教の一大特色となつた。

D. 理想的傾向

釋迦は現在の自己の孤獨に泣き生死昆迷の巷に立ちたる現在の自己の暗愚に泣き動亂と錯迷と誘惑との多き不安定不徹底なる現在の自己にもだへた彼の鋭き理智は自己の運命と自己の暗愚と自己の獸性とを淨ハリ鏡に照したるが如く明らかに見せつけた、彼の感情は哀調に波打つた、従つて暗より暗へ囚はれたる現實の自己を見てやるせなき涙にもだへた、同時に又彼は強き意志の人であつた、彼の強き意志は未だ贖はれざる現在の自己に對して痛烈なる反逆を企てた、彼は考へては泣き泣きては苦行し苦行しては又考へた、苦行の無價值を考へてはブラ／＼と苦行林をさまよひ出で他日再び苦行の森にさまよひ歸つた事を思へば如何に彼がもだへたかが解るであらう、彼は理智に生きんとする時苦行の無意味を知つたが而かも苦行を捨てては何所にも修道の餘地を見出さなかつた、考へ、泣き苦行し又考へた彼の内外生活の苦闘は現代僧侶諸氏の蓋し思半ばに過ぐるであらう。彼は深き理智の前に立て現實の自己を否定し強き意志の反逆に會ふて現實の自己を否定し寂しい情緒に引かれて現在の自己からのがれ出たいと痛切にもがいた、そして當然彼は理想を憧憬した、生死解脱の大槃涅槃界を前途に求めた小我を葬つて大我に生きたる勝者の法悦を未來にゑがいた、苦行林を出で尼連禪河に身体を清めて菩提樹下金剛座に坐して吾大覺を成せずんば誓つて此座を立たじと全我的冥想に入つたのは此の時である、かくて春秋幾度か過ぎ彼の前額にクモは巢を張り彼の膝下に蘆葦年々青く繁つた、實に彼の冥想は理想の全我的憧憬である、二月八日の早曉有情非情同時成道とうなつた時彼が理想實現の戦は遂に無上の光榮を以て終を告げたのである。

先日一友が『釋迦は冥想に依つて悟を開いたのである、故に吾人も冥想に依つて悟り得るにちがいないと思

ふ、然るに一僧侶曰く釋迦は例外である、吾人は決して自ら悟る事は出来ない、此事に關して宮田君の意見は？」と頗ぶる眞面目に問はれたので僕も面白い問題だと思つた、「併し悟ると言つても其の意味する内容如何で問題は種々に別れる、釋迦の通りに悟ると言ふのか吾人は吾人として悟ると言ふのかそれが先づ問題である、そして又釋迦の如く悟ると言ふ事が可能不可能と言ふ事と同時に必要不必要がなかく問題である」と僕は答へた、所が其友は其以上問ふ丈けの用意を持つてゐなかつたらしい。が僕は釋迦の如く悟る事は不可能であり不必要であると言ふ事をそして吾人は吾人の如く悟る事が可能であり且つ必要であると言ふ事が釋迦は慥かに悟と言ふ理想に突破を試みて成功したわけであつた、現實を否定し理想郷への突入が成功したのだ彼は理想を求め解脱を迫慕して遂に勝つたのである、従て佛教思想は理想的である現實を其のまゝ肯定するのでなく一度現實を悉く否定して其の否定の極限に立つて理想界への突破を最後の大飛躍として成功させるのである、佛教思想は理想的である、

E. 無我的傾向

釋迦が求めて而かもかち得た所のものは無我であつた、所謂無我とは彼が到達し得た理想の内容である、小我を否定し小智を滅し大我に生き大智の輝を悦樂したのであつた、而かも其の大我や大智は凡て圓滿平等遍在永遠なるものであつた、法華經壽量品偈の眞風光は實に此の大無我の遍在永遠を説いたものである、大地有情非情同時成道と叫んだ彼の眼中には一切が是もなく非もなく善惡差別を超越して肯定され一切の主觀客觀が生々と輝き渡つたのである、彼は一切を抱擁し一切を許し一切を生かしたのであつた、其風光は實に天地一枚佛几一體で大無我郷である彼我打つて一丸とされ等しくこれ眞如法界々のものとなり事々物々これ絶

對となり終つたのである、小智小我我執は斷絶されて無我の光、無我の憂が彼のかも得たる理想の尊嚴であつた蓮如上人が「佛法は無我にて候と書きしも手近き例証である、彼の理想卿は此の無我界の眞底であつた、一轉頓悟してからの彼は、此の無我界の王者であつた佛教經典を繙く時如何に無我思想があふれてゐるか解るであらう、四十二章經の開卷第一頁に世尊成道已作是思惟離欲寂定是最爲勝住大禪定降諸魔道とあるのを見て先程出した流轉三界中の第二句棄恩人無爲とあるを見て何れも専門的に渡らざる例証である。離欲寂靜と言ふは無我の消極的方面である、大禪定に住するとは無我の積極的風光である、入無爲とは無我無作に入る事である凡て一切の我執をはなれ舊人生を葬りたる力強き復活者の眞境である

佛教と言へば誰でもすぐに無常厭世隱遁無我唯心等の思想を思ひ浮べる無論自然主義が盛んに稱へられた頃正當に解釋せられないで多くの無實の罪を蒙つた如く佛教の此等の思想も理解なき群衆のために幾多の冤を蒙つた事は事實であるが要するに佛教は無我思想である、従つて近代人の行き方が著るしく主我的であることすれば此點に於て佛教は近代人と相容れないか、これは面白き研究問題である、が此を徹底的に考察するためには何うしても佛教の所謂無我を眞に理解しそして且近代人の主我的傾向が最後まで差別的なものであるか何うかを理解せぬばならぬ、佛教の無我は前述の如く差別の最終點に立ちて平等門への最後の大跳躍の風光である、若し近代の所謂主我的なるものが何所までも差別的の主我を主張するものであるならば吾人は近代人の不徹底を憐みたいオイケンに對する種々の批評の中「彼は自然と自我との交渉に無關心である」とは阿部氏の言である、吾人に言はしむれば茲に淺薄な近代人の病がある、自我は説いた、自我は考へた、けれども自我の眞生命は宇宙の全生命に即したる實在である事を眞に自覺し得た自我の風光を経験する事を忘れ

てゐる、即換言すれば漸次差別の深底に突入し最後の大跳躍に依つて平等界に出る事である、何うしても茲迄來ねば眞に生命を悦樂する事は出來ぬ、吾人は一生を通じて釋迦が教へた無我を眞に味つて行きたいと思ふ、そして近代者中の淺薄を憐みたい、

E. 中道的傾向

上來傾向と言ふ文字を使用し來つたから終りまで此れで通したが此は特徴と言ふ文字とたきかへて一向差支はない、偕て一度大悟徹底した釋迦は金剛座を立ちて酔へるものゝ如く生れたるものゝ如く胸にあふるゝ法悦をつゝみながら姿羅奈斯國の鹿野苑に出た、時に憍陳如摩訶男姿沙波阿說示跋提の五比丘は此の鹿野苑に止住してゐた。釋迦の來るのを見て五人は相約して曰ふ「沙門瞿曇(釋迦の姓)苦行を捨て、退轉し飲食の樂を受けて又道心なく今己に此に來たる我等起立して是を迎ふるを要せず何の敬禮をか用ひん、彼がために座を設くるなかれ坐せんと欲するものは隨意に坐せよ」と語り終つて默然としてゐる時はや釋迦は近いて來た。五人は覺悟す各々起立して禮拜奉迎し互に使役し衣鉢を持するあり水を捧ぐるあり或は釋迦の足を洗つてやる者もゐた釋迦曰く「汝等共に我を見て起立せざるを約しながら今何故に先きに誓ふ所に違ひ各自驚き起きて我が爲めに使役するや」と彼等五人は此語を聞きて先づ深く慚愧した曰く「瞿曇道を修して疲倦なきを得るや否や」釋迦曰く、「汝等何ぞ敢て無上尊に於て其姓を稱喚するや我が心空の如く諸の毀譽に於て分別する所なきも但汝等驕慢にして自ら惡報を招く人の子たる者父母の名を稱するから不可也况んや一切衆生の父母たる吾に於てをや」と彼等此語を聞いて曰ふ「我等愚痴智慧ある事なし是を以て今は己に正覺を成せる事を知らず先きに如來を見るに日に麻米を食ひ苦行六年然るに今還りて飲食の樂を受く是故に未だ道を得ずと

思惟せり」と釋迦彼等に語りて曰ふ「汝等小智を以て輕々しく我道の成ると成らざるとを量る事なかれ何を以ての故に形苦あれば心は惱亂す身樂にあれば情樂着す、是を以て苦樂二つながら道因にあらず、譬へば火を鑽りて是に澆ぐに水を以てすれば暗を照らすの光ある事なきが如く智慧の火を鑽るも亦復た是の如く苦樂の水あれば慧光生せず慧光生せざるを以ての故に生死の黑障滅する事能はず今若し能く苦樂を棄捨して中道を執りて之を行すれば心乃ち寂靜して能く彼の八正道即正見正思惟正語正業正命正精進正念正定を修して生老病死の患を離るゝに堪へたり我已に中道の行に隨順して阿耨多羅三藐三菩提を成すを得たり」と、それから五蘊を説き三毒を説き三界流轉の生々死々永遠に救はれざる自我の真相を説き中道の以て最良の道たるを説きて彼の五比丘をして阿羅漢果を得せしめたのである、佛遺教經の一番始めに釋迦牟尼佛初轉法輪度阿若憍陳如……とあるは即此の鹿野苑に於ける轉法輪を言ふのである、實に彼は一度傳道の途に上るや彼の主眼とする所は決して高遠なる哲理の説明でもなく官能主義耽溺生活又は難行苦行の極端なる禁慾でもなかつた右の説法に於て見るが如く耽溺も苦行も共に排して獨り中道の重んず可きを説いたのである、傳道の第一歩に於て中道を説いた彼は彌來常に中道の宣傳者を以て任じた、哲理と言ふ美しい無意味をさけて常に着實なる、中道を説いた此点では孔子やソ氏とよく似てゐる又クリストが成る可く奇蹟をさけて極めて止むを得ぬ場合にのみ恐るゝ奇蹟を行つたが如く釋迦は極めて止むを得ざる場合の外高邁な高踏的な理智は用ひなかつた、たまゝ哲理に走つたとしてもそれは前述の如く第二人稱をして己れの哲學を善用せしむるためか又は中道のための哲理であつた金剛座を立ちてより暫らくの間を華嚴時代と言ふ若し法華八軸が釋迦の宗教的偉大の標的であるとするならば華嚴時代の彼の廣長舌は哲學的偉大の標的であると言へるかも知れぬ。けれ

ごも是とても決して唯理的のものでない事は吾人の疑ふ能はざる所である、即中道をはなれた偉大は彼自身の偉大ではない、

G. 佛教文學

以上F迄の諸項は極めて簡單素略ではあるけれども吾人が見た釋迦の成道前後に於ける特に注意して見る可き点にして同時に佛教思想上の特徴として提供し得る所である、以上の諸項を書くにあつて頗ぶる困難に感じたのは現今の吾人の智識が未だ専門的に迄發達してゐらざればとて極めて常識的な否専門的な淺薄さにも自ら満足し得ぬ状態にあるが故に其所に著しく行き悩んだと言ふ事である、そして又今少し位は専門的に書く用意もあつたけれども余り専門語を並べると言ふ一友の忠言を拒みかねて成る可く簡單に書いたわけである。

楮面宗教としての佛教の色彩を教祖釋迦の人格の色彩から考へて來た吾人は茲に事のついでを以て佛教經典の特徴の一たる文學的方面について一言言及したいと思ふ是は吾人の此の論文には直接關係はないやうであるが佛教の諸特徴を見て來た序でに茲に書くのは不當ではないと思ふからである。是に關しては種々の著書があるが前田博士の「佛教要義と文學」と言ふ本が差し當り小冊子で要領を得てゐると思ふ。一度でも經典を手にした者は大抵の經が如是我聞で始つてゐる事を知つてゐるだらう、そして讀み行く内に多くの佛弟子が出て來ては釋迦の前に並ぶ其時釋尊の顔は光榮ある希望にもわたつ種々の端形相が現はれる天華が雨降るかくて其の端相の裏に釋尊は說法し始め玉ふ其の構想が決して神經過敏的でなく如何にも遠大であるのに驚くであらう法華經など余り浩瀚なる故吾人は未だ文學的方面迄は味讀し得ないけれども淨土三部經中の阿彌陀

經などは極く手近で訓讀しても廿分もあればやれるので吾人は常に拜讀してゐる其の構想が如何にも印度的で遠く深いのに驚ろく。又比譬の方面に是を見る時吾人は佛教經典は優に世界一だと信する耶蘇教の人々があの貧子のたとへを何時も威張るが法華二の卷の貧子の比譬と何れが宗教的及實際的父子の情をよく現はしてゐるだらうか又法華など讀んだ人は比譬が度々出て來る事と所謂偈文の度々出て來る事とに驚くであらう偈文が度々出て來る事は初學者には苦しい事である、それは讀むに骨が折れるからである。けれどもあの偈文とは詩ではないか、佛滅後の印度諸聖が結集の時に、佛直説を記憶せるまゝを誦じ出したまゝがあれ丈けの詩ではないか吾人は其の詩的構想の遠大なると同時に其の量に驚かざるを得ぬのである、以上簡單ではあるが吾人の釋迦研究の一斑である、第三章と共に親鸞研究の背景として諸君に呈する。

第三章 釋迦入滅後の佛教に就て。

偕而釋迦と及び當時の佛教とに就て研究したる吾人は茲に釋迦入滅より親鸞に至る二千余年間の佛教の概略に就て研究しやうと思ふ佛教歴史としては實に趣味甚深なる時代に屬するもので此に關する著書もたくさんあるそして又親鸞を知るためには何うしても少しでも知る必要があるが不幸にして吾人は詳細論に渡る時を持たぬ、殊に最初の原稿よりも第二の原稿は何れ程か紙數の都合上削減した、

a. 結集及上座大衆二派の分岐

釋迦入滅後僧衆の中から五百の比丘選ばれて摩竭陀國王舍城の近傍七葉窟前に講堂を建て、佛典の結集をした阿難陀は經を誦し優婆離は律を誦し大迦葉は上首として會誦七ヶ月に渡つて完成した是を第一回結集とし

王舍城の結集と言ふ、

後歲月を經るに從つて自由思想を抱けるもの増加し保守自由二派の間に爭論起る佛滅百年頃保守派の上首耶舍、自由派の上首弗栗僧各自説を固守して互に下らず此の爭論に依つて自然に催されたる結集が第二回結集で毘舍離結集と言ふ、

次で第三時期頃衆僧の間に異説甚だ起り、ために阿輸迦王は一千の比丘を鷄園寺に集めて目犍連子帝須を上首として佛説の結集をなさしめた是れ第三回の結集にして華氏城結集と言ふ當時保守自由兩派の争は益々烈しかつた、第二期迦膩色迦王の世佛教は一新開展をなした世友馬鳴以下の諸聖を迦溼彌羅に會して佛典を結集せしめ二十年にして完成した玄奘三藏の説に依れば此の結集の時始めて佛典中に大乘經典が加へられたと言つてゐる、大乘非佛説は或は眞理かも知れぬ、是が第四回の結集で佛典の結集は是で終を告げた、

此の五六世期間に於ける自由保守兩派の争は是を其の教理の上から研究すれば面白い事であらう、保守派を上座部と言ひ自由派を大衆部と言ふ佛家の所謂上座とは高弟の如き意にして大衆とは一般門弟とも言ふ可き意味である、

b. 印度諸聖と其教理

元來佛教々團と言ふものは釋迦の人格を中心にして自然に成立した所のものであつた、故に釋迦在世當時の佛教々團は實に統一あり秩序あつて釋迦の一言半句が凡ての問題に對する唯一の權威であつたかくて釋迦の偉大なる人格に攝理されて理智の舍利弗尊者も活動的の目蓮尊者も強記博學の阿難陀尊者も德行第一の大迦葉も凡て是等の人々は感情的にも亦理智の上からも個人的な溝渠を築く餘地がなかつた、舍利弗と目蓮と或

は他の諸弟子達の間にあつた競争が史實に見えてゐるが其は極めて清淨無邪氣なると愉快なる競争であつた、釋迦の偉大なる人格を中心にして集つた佛教々團は實に地上の天國印度の淨土であつた、従つて釋迦入滅後も尙人格の餘れる輝に依つて其所には暫らく教團が保たれてゐたが漸く年所を経るに従つて釋迦の人格も修道者の實際的生活を支配する程の權威でなくなつた、人格の偉大は無論傳へられたが其も今や昔物語か超人間者の物語として迎へらるゝに至つた、加ふるに印度人は思索的の民族である理智をもてあそぶ事を好む人間である此等の原因より佛入滅後の佛教々團は漸く支離滅裂の狀を呈し來たり、釋迦の實際的中道の宗教は全く忘れられて教團の人々は悉く深遠なる哲理的思辨に耽り始めた、そして釋迦の殘した經典が多くの哲學に説を知るに好都合なるの故を以て彼等は今や理智の満足を得んがためにのみ佛典を拜讀するに至つたかくて大乘たると小乗たるとを問はず否實際的の高尙にして無意味なる遊戯となつた、

かゝる時代に於て哲理的方面計りでなく又實際に宗教の生命を吸収した中の最も偉大なるものは無着世親馬鳴龍樹の四聖である、

先づ龍軍論師の後を受けて眞如緣起論を大成した者は馬鳴であつた、彼の傳記については古來種々の説があるが今は略す、眞如緣起論とは如來藏緣起論とも如來藏心緣起論とも言ふ。如來藏心とは自性清淨心の事にして大衆部に説く所の心性本淨と言ふのである、此心が起動して宇宙万有を展開するの理を説くもので絶對的唯心論である、即絶對的唯心論なるが故に相對的の心識に比すれば所謂の心は非心非物の理体である清涼國師は是を總該萬有心と名付けた、然るに眞如即ち非心非物の理体を心識の中に求むる故に單なる唯理論ではない、仍ち唯心論たる所以である、換言すれば宇宙の本体を吾人の心性として説明する所の宇宙論である

此説を最も完成したものは馬鳴の大乗起信論である、

頼耶緣起論は無着天親護法等の諸聖が稱道した所のもので第八識阿頼耶識なる者を吾人心識の深奥に立て此の第八識こそ能く一切萬有を開展す可き源因を攝取して失はずと言ふ。彼の業感緣起論の如きは萬有展開の源因を自己の業力にいたれども此の緣起論にありては更らに進みて其の業力を保持する阿頼耶識に就て萬有開展の理を説明するものである、

次に龍樹や世親に依つて稱道されたる法界緣起論とは如何なるものかは總收法界爲一緣起と言つて限りなき宇宙萬有を一團とし此の一團の萬有は皆互に密接の關係ありて孤立獨存するものでない此の一物はそれ自身以外の一切萬有に對して緣となり、他の一切萬有は此の一物に向つて緣となる、斯く自他相資け相持つて圓融無礙自由自在なりと論するのである、頼耶緣起論は宇宙萬有の展開す可き起因を現象界に屬する第八識を以て説明せんとした又眞如緣起論は現象界に屬する第八識から尙進んで實體界の眞如に歸し其の眞如より萬有一切は生れると説いたが此の法界緣起論に依つては現象や實在界の一方に偏する事なく萬有一切は互に因となり果となりと萬物生々の徳は輝くのだとした、是説は實大乘中の圓教の所説であるが科學的宇宙論とも哲學的宇宙論とも言へる、耶蘇教の創造説の如き己に論するに足らずと言へどもたとひ其の所謂創造主なるもの理体と見て眞如とし神は眞如の人格化なりなどとしても未だ眞如緣起論の乙種にすぎぬ、吾人の哲學的要求は何うしても法界緣起論迄來ねば満足せぬ、

尙是等の事は研究する程面白くもなり又宗教的滋味にも富んでゐる事であるが大体の紹介に止めて後日を待たう

印度諸聖と其の教理とを今は單に宇宙論に於てのみ考へたが是れ丈でも吾人は次の斷定を與へ得る、「一般を通じて哲理的思辨が勢力を得て宗教が決して單なる哲學でない事を忘れんとした」と言ふ斷定である、故に彼等の間には、年若かく氣盛んにして精力あふるゝ時代には盛んに大乘深遠なる哲理の究明に日夜を費し且つ其の思索の深遠なるを誇つたが晩年氣力漸く衰へ死の當さに迫らんとするに驚いて俄かに方向轉換をなし、實際的宗教の求道者となり靜かに救ひの恩寵に泣いたものも少くなかつた、

當時佛教は盛んになつたが併し釋迦の眞面目が何れ丈け傳へられたかは著しき疑問である無論宗教も文化的產物である以上人文の發展と共に推移して行くのは事實で又必要な事である故に釋迦の眞面目が何れ丈け傳へられやうと傳へられまいとそれが直ちに當時の宗教の價值批判の標準にはならぬが深遠なる哲理のみの發達が遂に人生解決の最後であるか何うか其所に問題があるを以て後に出る親鸞が身を以てなした此の問題の解決が吾人に甚大の意義を與へはすまいか、眞面目なる人生研究者は常にかゝる問題をみのがしてはならぬと思ふ。

c. 支那及日本の諸聖

佛教東漸に南北二路あり、北方の流傳は印度の北部から發して東トルコスタンを經て支那に入り更に朝鮮を過ぎて日本に入つた、今一つ、南方の流傳は印度より錫蘭緬甸スマトラ瓜哇暹羅安南を通じて支那日本に入つたものである、後漢の明帝の時始めて支那に入つてから隨分多くの偉人を支那佛教は生んだ、尤も孔孟の流を汲む人等に依つて異端外道とせられ老子の虛無思想に似通つてゐると言ふので迫害せられた事は事實であり、又佛教者の方では孔孟も老子も共に現世一世の教であつて決して過去未來の解決を與へない然るに佛教

は過去現在未來の三世を通じての自己の解決なるが故と言つて威張つた事も事實である、支那佛教史に關する著書は歐文漢文邦文共に可成ある、

支那諸聖の中に於ては東晋の羅曇唐の玄奘三藏を始め杜順、智儼賢首達磨慧可善導等は凡て哲理的、又傳道的方面に於て又は救濟的宗教樹立に於て善戰した人々である、が大抵は宇宙論の各派にしても實相論中の各部門にしても印度諸聖の教理を傳へて是をいくらか進歩せしめたに止まるもので著るしき獨創は生れなかつたやうである、無論佛典の解釋などは支那に於て獨創的な見方をした者も少くなかつた、今日淨土眞宗に於ける善導大師の觀經疏の如は甚大の意義を有するものである、前項印度諸聖に就て論する際宇宙論を以てしたから今度支那諸聖の場合に實相論を出す心算であつたが止した。

神武紀元一二二年佛教日本に傳來してより親鸞の眞宗開立に到る六百七十二年間に於て日本佛教は隨分多くの宗教的偉人を生んだ、大化改新以前に於ては三論宗成實宗が慧觀に依りて宣揚され、以後に於ては法相宗俱舍宗修驗宗が道昭和尙智通智達に依つて稱へられ奈良朝時代に於ては華嚴宗律宗が審祥良辨及道光普照等に依つて稱へられ所謂三戒壇が設けられたのも此の時代の事である。平安朝時代に至ると漸く文學宗教共に隆盛を來たし、眞の聖者も出づれば法衣をつけた狼も出た、天台宗は最澄に依りて宣揚され眞言宗は空海に依りて廣く民間の勢力となり融通念佛宗は良忍に依つて開立され淨土宗は法然上人に依つて吉水の禪宗より救濟の權化として表はれたちまらにして上下を通じての宗教となつた、次いで時代は急轉して鎌倉時代となつた、前平安朝時代の大宮人が櫻かざして今日も暮らすてふ時と違つて東男子が力まかせに長刀を打振る時である、彼の雲の行く手の方にては我が夫は戦ひ、あの鳥のこび行く彼方にては我が子の初陣。入日沈み

行く方をながめては戎衣の袖を絞る白髯の將もゐた、殺伐の風流れて人の命は昨日も今日も入相の鐘のやうに寂しう消れて行く。かゝる時人は深い哲理の宗教を聞く餘裕を持たぬ極めて平民的な實際的な宗教が生れるのは理の當然である禪は生れた、眞宗も時宗も日蓮も生れた、禪の如く學問的に取ればいくらでも哲學的含蓄に富む宗教も當時にあつては極めて通俗平民的の宗教であり得た、時宗は一遍上人に依つて禪榮西道元に依つて開立され、日蓮は吾は法華經の行者日蓮なり常不輕菩薩の再來なり、上行菩薩なり、鳥は鳴け其涙を出さず日蓮は泣かざれども涙せぬ日はなしと言つた日蓮に依つて開立され、淨土眞宗は我が聖親鸞に依つて皇紀一八八四年教行信證六卷の著述と共に立教開示された、所謂眞宗とは淨土宗とか日蓮とかに對する相對的の名目ではない、一切宗教の中眞に親鸞を救ふ宗教は念佛成佛の外にない、念佛成佛は眞宗との意味である即ち絶對的の名目である、

第四章 親鸞研究

a. 出家求道

皇紀一〇四年四月八日早曉旭日うららかにヒマラヤの高峯に五彩の光を投げた頃百花咲き亂れたる中印度藍毗尼園に釋迦は天上天下唯我獨尊と獅子吼して生れた皇紀一八三三年四月一日洛外日野の別野に我が親鸞は沈黙の子として生れた彼は暑い中印度に生れ此は温和な日本に生れた彼は降誕直ちに三步して獅子の如き尊嚴の聲を發し此は生れて二星霜一言も發し得なかつた彼の父は王であり此の父は皇太后の宮大進である彼は出生間もなく母摩耶と死別し此は甫めて四才父を失ひ九才にして母と永遠の別を告げた、彼は叔母に育てられ此は伯父に育てられた、彼は廿九才私かに宮城を遁れて出家し此は九才伯父につれられて出家した。

釋迦の出家前と親鸞の出家前とよく似通つてゐる彼は門外に迦留陀夷と散歩して老人を見病者を見死人を見た、そして此等のものに對して彼の理智と潮のやうに湧き來たる彼の情緒とは深い洞察と熱い同情とを投げたのであつた、吾人は山邊習學氏の佛弟子傳中の迦留陀夷傳を如何に神聖なる興味を以て讀んだであらう神性と獸性聖者と凡夫との角力は眞面目なる求道者にとつては直接興味ある、釋迦は生老病氣に泣いた生老病死混沌の中に自己を見出した、近來一友余に曰ふ、生老病死など問題でない、吾人は其友に對して同情した生老病死とは自己の問題ではないか概念化されたる生老病死は問題になり得ぬ併し現在の自己の眞底に渦巻ける生老病死が問題でないと言ふなら其人はまだ自己が問題になつてゐないのだ、哲學的傾向の人に取つては現在の事實にして而かも不可思議なる生と全くの暗黒裡に渦巻けるいとど神秘なる死とが最も問題になる、今後の哲學上の問題は生命の問題意識の問題性の問題であるとは等しく認むる所であるが而かも生其のものの中には其以上の神秘が含まれてはゐないか若し哲學科の人間であつて單に現在の學科の外何物も中心的な問題を持たぬか或は持つてゐながらも其を何うにか解決しやうと言ふ勇氣を持たぬ人であつたならば吾人は其人に向つて汝等は哲學者たるの資格がないと言言を下すであらう、無論其人等とてもプラトウやカントの糟粕をなむる事は出來やう、併し年齢已に廿才以上になつて未だ中心的に自己自身の人生觀に惱まぬ人等に何うして生命ある哲學が生れやう、時代は單なる學者としての哲學者を要求せぬ、眞に生命ある哲學ならばたとへそれが全然日本語計りから成立つて居らうとも時代の要求する所である、實に思へば思ふ程自己の生自己の死は問題である、ソクラテスは哲學とは死の學問なりとも言つた、實に生と死とは大問題であるも其の問題が其のまゝ一つの自己である、釋迦が問題にした生老病死は國家位地父母妻子乃至一切を放棄し

でも解決しなければならぬ所のものであつた、常識派の人々がわかつたらしい顔をしてゐるのは横から見てゐる吾人にとつて實に惨めなる滑稽である、彼等が云ふ所の生老病院は釋迦が問題にした程の深さと幅のある生老病死たり得ぬのだ、或は斯くの如く迄深酷に生死問題につしる事の價値如何を問ふ人があるかも知れぬが吾人は其に明細に答へる時を持たぬ、自己改造とか生命の悦樂とかを眞に問題にしてゐるか何うかを反省して貰へばそれで足りる、且又吾人は價値以外に止むに止まれぬ状態にあるのだ釋迦も止むに止まれぬ状態にあつたのだ此所まで行くに價値の問題でない只何うにでも突破しなくつては生きてたれないのだ、自己現在の生の眞底に渦巻けるとも言へる又は剎那の自己を中心として久遠の大暗黒が跳躑してゐるとも言へる此の大死海に當面したものは何んな高値な努力を拂つても其所を打破つて九死に一生の大活路を求め得なくつては生きてたれないのだ、そしてかくてかち得られたる光明の大活路が我が生に對する價値から推論して三段論法的に如斯生死問題に當面する事それ自身の價値に言及する事も出來ぬ事はない、けれども價値の決定は批判の生む所で批判は第三者の權威であるが第一人者の尊權ではない、價値を云爲するヒマなく止むに止まれぬ状態にたかれたる者の努力は第一人者の尊權である、釋迦が生死を問題にした其の内部努力は正しく第一人者の尊權そのものではあるまいか。

釋迦が生老病死を問題にしたる如く我が親鸞にも生と死とが問題であつた早く父母を失つた彼は人生の悲慘にフレたのも早かつた、道元禪師は未だ四五才の頃佛前に立ち上る香の煙がほんの僅かにして不可見界に消へ去るを見てギョット疑問にフレたとか心あるものはこれである、

親鸞出家當時の彼の背景として日本歴史としての鎌倉時代の深い研究と手近いものとしては建曆二年鴨長明

が外山の庵にとちこもつて阿彌陀佛の尊前で書き終へたと云ふ方丈記などを提供しなければならぬ、「和養の頃かよ久しくなりて確かにも覺えず二年が間世の中飢渴して淺ましき事侍りき或は春夏日でり或は秋冬大風大水などよからぬ事共うちつゞきて五穀悉く實らず……よろしき姿したるものひたすら家毎に乞ひありかくわびしれたる者共ありくかと思れば則仆れふしぬついぢのつら路頭に飢ゑ死ぬる類は數も知らずとり捨つるわざもなければ臭き香世界にみち／＼て變り行くかたち有様目もあてられぬ事多かり……」方丈記を讀んだ人は慄然として再讀するに耐わなかつたであらう。

藤原氏の榮華は昨日の夢一門は正しく世期末の悲哀を経験すべく余議なくせられた、平氏は起り源氏は勝ち北條氏は腕を振つて自家の權勢を張つたが當代は要するに足利戰國の大修羅場を生む可き母たるの資格に於て遺憾はなかつた實に藤原氏の運命は滅亡のきはしを下る者の戰慄そのものである、搗てゝ方丈記に見た如く人心轉た安からず親鸞はかゝる時に生れ合して「汝必ず出家して父母の菩提を吊へ」と言ふ母監未の言葉に従つて彼は遂に比叡に登つたのである。

佐々木月樵氏著親鸞傳繪記にかう書いてある、

我聖人は東塔無動寺大業院に入らせられた

其よりは専ら慈圓和尚は勿論竹林房……等を師とたのみて學問修行遊ばされた事である、

流石は平安朝佛敎の中心たりし比叡の山丈けである、當時戰亂の世なりとは言へ尙これらの學匠の外にも源平の戰さね知らずに三大部の注疏を書きてゐた所の寶池房證真と言ふやうな學者も居たのであつた。けれどなまきけなや、斯の如き學者はなきにしもあらざれど我が出離生死(生死解脱)一大事を解決して下さる御師

匠は一人として之を山上に求むる事は出来なかつた、其所で我が聖人には時々山を下つて遠くに仁和寺法隆寺又は南都東大寺までも御出かけになつた事である、熱心に慶尊覺蓮光俊空圓等の名師より華嚴三論法相律等の教をも受けさせられたがこれとても我が求むる生死掘脱の事に就ては只何等の交渉もなく漠然として何の得る所もない一心三觀の理は聞けば一往成程とわかる、わかつた所で我が現前一念の妄念は我力で以て如何んともしたい、一乘三乘の教は傳教大師以來の大問題である幸に今日此問題が教義上決着出来た所が我が問題とは直接何等の交渉はないのである、あゝどうしようか、指折り數ふれば我聖人にはかくの如くにして出家登山以來茲に何の得る所もなく十年の秋を迎へ玉ふ事とはなつた、さらぬだに秋は寂しい、

一日我聖人はいたく假名の學につかれてフラ／＼と山を降らせられた別にこれとあてごのあるでもない唯何とも言へぬ我胸に湧きくるあてなき思に促がされつチット一室に聖教を繙き居ることが出来なかつた故である、それより此所に一日彼所に二日と晝は散り行く木々の枯葉に人生の無情を感じ夜は靈佛靈社に祈願の誠を致しつゝ建久二年九月十二日夕日力なく西の山の端にかゝつて暮れ方のあわれさ身に泌む頃河州石川郡東條磯長の里につかれた(中略)

再び我聖人は東塔無動寺大業院に入らせられた、同じく入らせられたのであるが先きに入らせられたのは學問修行のためであつた、今入らせられたのは生死解脱の要道のためである、されど悲哉「定心を凝らすと雖ども識浪頻りに動き心月を觀すと雖も妄雲猶は覆ふ然るに一息つかざれば千歳に長く行く何ぞ浮生の交衆をむさぼつて徒らに假名の修道につかれん」只生の悶は月と共に加はり死の怖れは日と共に進むのである、

あゝ如何せん、あゝ如何せん、之を訴へんに師なく語らんに友なく而かも自ら救ふ可き道とてもない寝むれば覺め覺むれば思ひ夜となく晝となく昏迷惱亂された事である(中略)

我聖人は三度東塔無動寺大乘院に入らせられた、何故か此度は終日終夜人にもあはず殊に又人の其内に入るをも禁じ玉ふ(中略)

我聖人離山訣別の書は突然山上に於ける學侶達の許に達したのである、

如今兵部を以て捧愚書候

予此年月台星の峰に在て舍那圓頓の菓を拾ひ三蜜上觀の水を汲むとも頑魯にて未だ迷惑出離の道を知らず生死の顛倒を常に怖れ福林國清及修禪の寶殿に圓誠を抽んで神の冥慮を仰ぎ終に山王權現の神託を受け今夜此の觀音の寶前に通夜せしめて重ねて菩薩の告命を蒙り直ちに日願の積願を満足せしむ仍て今日寶幢の場を謙下し通世の樞にかくれ終ぬ、今生の拜謁是を限りに候以上 建仁元年二月十日、僧都範宴寶幢院學侶御中 あゝ我聖人は遂に何れにか通世し玉へる其後比叡山上にては永久其の影だに見る事は出來なかつたのである

(下略、以上佐々木氏の著より抜ぐ)

已に出家の動機に於て相似たる釋迦と親鸞とは又其の修道に於て極めて相似通つてゐる勿論出家の動機の相似たるは獨り釋迦と親鸞と計りではない、佛教中の多くの偉人が大抵同じやうな色彩の動機に依つて出家してゐる。是は矢張一面から言へば其のやうな心的状態になつた人が釋迦のあとを追うて出家を思立つので其所に人情の機微がある、

釋迦は出家直ちに苦行の森に入つたが彼の理智が何うしても單なる苦行を肯定せぬ、遂に苦行は中心的の信

仰に何等交渉なきを宣言して、苦行林を捨てた、そして方々と道を求めて歩いた。時にはあの有名なアララカララと言ふ數論學派の二大仙人にも會つた生死に就て問答する所あつたが何うも徹底してゐない、此時釋迦は眞に泣いた、苦行の無意味は否定する事が出來ぬさればとて苦行林を出で、は修道の餘地がない、親鸞が訴へんに師なく語らんに友なく而かも我力で以て如何とも仕難いと泣いたのも是であつた、釋迦は詮方なく再び苦行林に入つた、親鸞も泣くく比叡に歸つたけれども釋迦は已に自己の問題に醒めてゐる如く苦行の使命にも目醒めてゐる、遂に再び苦行林を捨て、前述の如く菩提樹下金剛座上の全我的理想の追求者となつた、その如く親鸞も自己自身に醒めてゐる事の眞劔なる丈けそれ丈け比叡山上の宗教哲學が遂に第一義の者でない事を深信してゐた、比叡山上彼は華嚴天台法相三論律等の哲理の深奥を極めた、釋迦が極めて理智の人であつた如く親鸞も亦理智に於て優れてゐた今日彼の著述を見れば如何に要領を得てゐるか如何に獨創的に大膽な見方をしてゐるか是等は凡て彼の信仰の色彩の然らしむる所ではあるがそれと同時に理智の人たりし証明となる一大佛敎を凡て敎行信證六卷に收めた手腕は等しく人の認むる所である、唯此の修道中に於ける釋迦と親鸞との相違は釋迦は祈禱を用ひなかつた親鸞は用ひたと云ふ事と最後の徹底が釋迦は獨り自ら悟り親鸞は人に依つて徹底にまで導かれたと言ふ事である。吾人一個の考を持つれば釋迦も實際は祈を用ひたけれども傳記作者が傳へなかつたのだと言ふのでなくして彼は實際に祈禱を用ひなかつたのだと思ふ又論者の中には印度の當時祈禱の思想及形式がなかつたかの如く言ふ者もあるけれども其は誤りである、祈禱の思想も形式も非常に發達してゐたらしい、そして釋迦が後に常に魔と叫んだ所のものは多く祈禱が妖術として用ひられた所のものとやうである、吾人は思ふに、僅かな事であるが茲に兩者の性格の差異を見る事が

出来る、人の性格は不用意な時にも現はれるが又最も眞劍になつてゐる時にも現はれる、釋迦は初めから強者で親鸞は始めから弱者たる性格を備へてゐたのではあるまいか困り果てた時には不覺神や佛にすがる程に親鸞は人間らしい地上の者であつたのではあるまいか

吾人は當時の親鸞の内生活に今少し立入つて考へたい、そして一切の傳記をはなれた親鸞即吾人の生死問題と直接交渉ある親鸞を見たい、吾人自身の親鸞を見たい、

「吾行く所吾が死は立てり」親鸞の懊惱は此に即したものである、彼の存在する所所として彼の死の立たざる所なく彼の生存せる時時として彼の死の肉迫せざる時はない、杜翁は死は怖いものでない、死を怖るゝ我が心を持ってあますのだと言てゐる、けれども何んだか説明的でイヤな氣がする、死を怖るゝ心は死に即したる心である、死に即したる自己死に強迫されたる自己である、杜翁の言でみると死と怖る心との間にX時間の距離がある、二元的であるやうであるけれども斯くの如きは常識的客觀的である、死を怖るゝ心が眞實胸中に湧き來つた刹那はX時間と言ふ距離の認識はあり得ない死の肉迫の直覺それだけが全部である、眞の死の怖恐は其所にのみある、アンドレエフの七死刑囚物語に「セルゲイの怖れたのは死を見たからではない、死と生を同時に見たからである」と言つてゐる、此所まで來るともう人は狂者にならねばならぬ程生の努力と死の肉迫とに醒めるのである、杜翁の言は何んだか説教者的でアンドレエフに至つて吾人は我が意を得たやうな氣がする、生と死とを同時に見るのである、生の執着生の肯定生の慾求其等の渦巻ける巷に黒い死の肉迫を経験するのである、死の否定的黒闇と生の肯定的殘照とが烈しく相闘ふ現在の自己に當面したる内心の苦惱其が親鸞のフルたる自己の苦惱であつた、痛烈なる生死解脱の要求は此所に湧くのである、親鸞と言ふ一

個の生ある所其所に死は肉迫してたり、

親鸞と言ふ一個の生の介在せる刹那其の刹那の中に彼の死は肉迫してゐる、影の形につきまどふが如く若し吾人が日光の直射する所に立てば如何に走つても亦座つてみてもねてみても影は小面悪くつきまどふのである、そして捕へんとして永久の徒勞である、吾人の内的生活に於ける光線とは即内面に目醒めたる鋭い目である、此の目こそは滅多に何物にも欺かれず何物をも破壊しなければそして否定の世界に投じなければ止まないのである、此の鋭い眼が我が生を見た時同時に死を見る、死を見た時同時に生を見る、此の眼の未だ醒めない生活は生も思はず死も怖れないで而かも何等かのチャンスあれば直ちに深奥の悲哀裡に自己を發見しなければならぬ「不安定極まる平靜生活」と言ふやうな矛盾せる言葉に依つて現はされるやうな生活ではあるまいか「破綻の前の一睡の夢」のやうな生活ではあるまいか、未だ最後の解決もなくさればとて生も見ず死も見ざる者の生活程吾人精神生活者の眼から見てあはれな空虚生活はないカラ芋の如くブタの如き生活ではあるまいか、たとへ精神上の苦闘にやつれつかれて人生問題に惱乱さるゝが故に何時も沈黙と冥想とに耽ける悲しみはあつても此の所謂眼の已に醒めたるものゝ生活は陽氣な安い生活と比して其の誠實の上に於て又其の價値の上に於いて蓋し雲泥の差があるであらう、

親鸞比叡山上二十年間の苦闘のあとを見れば彼は禪もやつた、華嚴天台法相三論の妙諦をもやつたけれども此等は要するに彼の所謂眼に對して何れ丈けの權威であり得たか若し親鸞の此の所謂眼が安價なる妥協性に富んでゐたならば彼に何れ丈けの苦痛はなかつたかも知れぬ、哲理の深達も遂に彼を妥協させる事が出来なかつたのである、

死をはなれて生を見やうとするのは安價なる享樂者の行き方である、生を見ずに死を見ようとするのは形骸の宗教にとらはれたる人達の行き方である生と死とを同時に見ざるを得ない人にして始めて眞實なる人生研究者であつて眞信仰への人である従て彼は全分的苦痛に身も心も碎かねばならぬ彼とは親鸞ではなかつたがそして又吾人ではないか

親鸞の此の懊惱は遂に如何にあとづけられるべきか彼は勝つか敗れるか是れ吾人が項を改めて書かんとする所である、

b. 入信の勝利

菩提樹下金剛座上に於ける釋迦の大悟徹底の眞風光を直截簡明に傳へた記録はないかこれ吾人が常に心掛けて探し求めてゐる所である求道者たりし釋迦が救世主として即所謂出山の釋迦として再び娑婆世界に歸來するに至りし其の一轉機の眞面目は那邊に存するか、吾人は是を何等かの記録から簡單に知りたいたと常に思ふのである、

是の彼の悟の眞風光が吾人に傳わられない限り吾人と釋迦とは他人ではあるまいか若し吾人と釋迦とをして眞に握手せしむる唯一のカギがあるとするならば其は悟の神秘を開放する事でなければならぬ釋迦がいくら數千万卷の經文を吾人に送つても其の秘奥の悟そのものを赤裸に吾人に披歴しない限り吾人は釋迦と肝膽相照す事は出來ぬのである又たとひ釋迦は吾人求道者の師表であるとするも師たる釋迦の自内證が吾人の端腕を許さぬならば吾人は偶像の如く彼を見るより外仕方がないではあるまいか、あれ丈け廣汎な佛教が釋迦に依つて生れそして釋迦をして出山の釋迦たらしめたるものは實に菩提樹下の大悟にありとするならば一大

佛教の中心は矢張此の大悟にあるとしなければならぬ、而かも其の大悟が吾人に神秘として許される丈けで其以上何等の手掛りも許されぬとしたなら吾人は佛教／＼とさわぎながら而かも其の大切なる中心生命を知らぬ徒たるにすぎないではあるまいか、中心生命を持たぬ佛教徒はこれためたき沙汰の限りであると言はねばならぬ、

於此古今の求道者が是に關して種々探求し憶測し種々の論を立てゝある釋迦は本來佛である佛が人間の形を現はして救世の大本願のために此世に降誕したのである従つて彼の道程彼の大悟は吾人の端睨を許さぬものであるとした思想も出て來た、如來の三身説の思想の如き無論彼の人格の偉大からと又後代に於て彼に残された多くの教曲とから出て來た思想に相違ないけれども其の思想に私かに確實性を與へた所のものは矢張彼の悟の秘密としなければならぬ彼を貴族に的偶像的に超人間的にした源は矢張其所にあると言はねばならぬ又不立文字教外別傳も以心傳心も釋迦の大悟の秘密から生れた思想であると吾人は見る以心傳心とは即教外別傳である所作言語の絶わたる極根に尙一步進展せる自我の表現が相手のそれと相打つたんてきが以心傳心である、粘華微笑の釋迦と大迦葉との宗教劇は正しく以心傳心それ自身であるが、以心傳心がよく釋迦の大悟を開放したか何うか疑問であると同時に以心傳心の徹底せる經驗が何け丈け人間に實際あり得るかが疑問である、

吾人は近來切に茲に問題を持つ。それは現代の各方面の人々と共に釋迦を本來の佛と見る事を余り價值ある事と思はなくなつたからである、何故か、それは説明す可き時間を持たぬ只諸君の胸底に流れてゐると同じやうな理由からと及び吾人の信仰が著しく無神論的であるからである、何うしても釋迦を人間と先づ見た

い、人間としての釋迦としたい、而かも釋迦の生命が悟にあるとするならば釋迦を人間列に持て來ると言ふ事は同時に彼の悟の金箔をはぎとつて赤裸の悟を吾人心靈中に持てくると言ふ事でなからねばならぬ。

釋迦の大悟に關する吾人の意見は是をあとまわしにして此間に彼の菩提樹下と恰かも比適すべき親鸞の吉水入室に就て考へてみるであらう、前項所述の如く彼は生死解脫の大問題に蓬着して今や勝つか敗れるかの境に迄建んで來た、彼は一生懸命である只如何にして此死を征服して永生の勝利者となる可きか、絶對の問題である換言すれば如何にして大悟郷に突入し得可きか如何にせば大悟が創作せらるるか

吉水の禪房 法然と親鸞と對面

親鸞は廿九才の青年僧侶である廿年來の精神苦闘のため頬肉は削られ手足は若き肉の香もなく只眼のみが狂者の如く鋭く光つてゐた、時に法然は六十九歳の老僧である智慧第一の法然房と時人に謳はれた其のかみの元氣は今や美しき念佛の聲にとかさて見るからに心靜けく佛尊き尊容である「身には墨染の法衣を一着し同じ袈裟をかけたるのみ手には菩提樹の念珠を持ちて端然として跌座したる老僧こそ正しく源空上人に在すべけれ法海の波深く額に刻まれて慈悲の笑和やかに毗に集れり黄色に輝やく瞳の光は炯々として此の中より射來れるなり」とは須藤氏の筆である、

親「一体何うすればよいのです」

法「何を何うと言はれますぞ」

親「此の生です此の死です」

法「フム……」法然はデツと眞面目に控へた、

親「私は實に此の生を持てあましてゐる此の死を持てあましてゐる死が一切の滅であるならば此の無意味な生を寧ろ滅の世界に永遠に葬りたいと思ひます、けれども死が果して最後の滅であるか何うか此の生のある所此の死あるが如く、あゝ此の死ある所又此の生ありはすまいか。私は生に力がありません何等の解決もなく何等の意義もありません、只私の此の生は私のために此の死を念々に作つてゐるのみです、此の刹那から次の刹那に私の生がのびますそして其所に新らしく私の死を作るのです、是を思ふと實際、死が一切の滅で空々寂々の世界であればよいと思ひます、そしてひと思ひに死んでしまいたいと思ひます。けれども矢張死が一切の滅であつては困る、死が最後の滅であつたら何うしやう、永久の滅であつたら、永久の滅、滅の世界は生の永久の否定ではありませんか、何うして死なれませう、私は永遠に生きたいのです、天國でも淨土でも又は此の人間の地上でもよい、滅の權威に打勝つて私は何所までも生きたい、友と私との間の美しい世界兄弟や一切の人々と私との間に起り來たる麗はしい世界私は其等をも永久に持續したいのです、だけれども生を言へばすぐに又生の無意義に想到しなければなりませんぬ美しいもの徹底せるもの永久なるものを此の地上の何所に見出す事が出來ませう、其れも私が自己を忘れて考ふれば其所に美しいものもあるやうですけれども嚴肅に自己に立ち歸りました時何所に眞に自己を粹化させ充實せしむる何物が此地上にあらうか、あゝ空の空なるかな地上のものは凡て空の空ではありませんか、私は比叡山上又は洛中洛外より南都のあたりまで徹底の説教を求めて歩きましたが只殘るものは私と言ふ不可思議なる生そのものです、今や私は坐つてもたれず立つてもたれず死にもされず、矛盾せる事を言つて矛盾せる事を考へて大地に此の身を投げて懊惱する計りです、何うすれば一体よいと言ふのでしやう……」熱い涙が一時にとつとこみ上げて親鸞は狂せる者の如く身をもたへるのであつた。

法然の老の慈眼に涙が宿つた、

「長い物語を聞いてわしも昔が思はれる實に長い間ちやつた、わしも生に困り死に困り、困り／＼つて何うにもならぬ、廣く一切經を五度もくり返して拜讀したが矢張いかぬ外の仲間達がわしを氣狂ひだとか何とか惡い批評もした、が何うにかして何うにかしなればならぬ飯も頂かずねもせず泣いた事だ、此の問題に出合つた人の生活はそりやう心ある者でなければわかれぬ、たん身もた苦しい事であらう、が矢張何うにもならぬ……」親鸞はフト顔を上げた、

「何、何うにもならぬぞ？」法然は靜かに制して言葉をつづけた、

「いやささう驚きなさんな、靜かに、靜かに、それさうしてわしが困りぬいてゐた時もう一度勇氣を出して拜讀したのがあの善導大師の散善義だ一心に念佛するものは必ず往生すると言ふ御文、其の御文を讀むと急轉直下だつたわしの心の雲晴れて生も死も一切を上げて如來に御任せ出來たのぢや、此の生此の死何うにもかうにも解決つけやうなきを如來はよく知ろしめして只此にすがれよと念佛と言ふ救ひのつなを與へて下さつたのぢや此のわしの胸の中をよく／＼知りぬいての上の救濟だと思つた時わしは一切の我慢を捨てて凡てを此の親様にた任せ申した、其の任せの心の表現がわしの念佛ぢや、

世の中に教と言ふ教は數知れぬ程ある、何れの教も尊いであらうけれど、われらの心は其の教の通りに何うしてもならぬ、それだで折角の教もわれらのためにやくに立たぬ、只此上は凡てを許し玉ふ如來に一切を任せするさ、又たとへた任せも出來ぬなら出來ぬまゝに、煩悶の風立ちさわぎ五慾の惡魔の荒れ狂ふまゝに念佛するのみぞわれらに相應せる御教ぢや、尊きかなく」

法然は説き終つて靜かに念珠つまぐりながら南無阿彌陀佛と念佛した、打ちふして聞いてゐた親鸞の胸に最後の一句がぐつと應へた、せき上ぐる涙をチツと抑へて恐る／＼顔を上ぐれば崇嚴なる法然の顔に温容の光流れて眼には涙さゝ宿つてゐる熱した親鸞の眼光は慈愛に満ちた法然の目とピタリ合つた、親鸞再び頭をたれた、夢か現か、胸に血潮が湧き返へる狂か喜か、だん／＼に烈しくなり行く親鸞のすすりなきのまにまに法然の力ある念佛の聲は低く聞けた、

親鸞は後に常陸の國からはるばる京都迄求道の念にかられて尋ね來つた老若男女に對して自己信念を告白して曰つてゐる、

諸君がはるばる身命を賭して常陸から此所京都迄やつて來られた志は一遍にこれ生死解脱の道を聞かんがためであらう、然るに余は念佛より外には別に深遠な哲理は知らぬのだから深い哲學の話が聞きたいのなら此所は門違ひだ若しそれなら南都の諸寺又は比叡に行けばいくらでも學者達がたられる事であるから行つて直接聞かるとがよからう、此の親鸞は生も死も一切如來の天命に任かせて只念佛しながら如來の生命に生きると言ふ信念より外には何も知らぬそして是は法然上人の御教だ念佛は眞實なる宗教であるか何うか念佛は眞に自我の發展擴充であり得るか何うか念佛は眞に生死解脱の良法であるか何うかそんな事は余はよくは知らぬ余がいくら念佛は無上の大道であるなどと力んだ所であかぬ話だにも余は自己の信念の効能書を諸君に紹介する必要も餘裕も持たぬ是は何も下手な謙遜や卑下自慢やそんなものでないからよく氣を止めて聞いて下さらんと行かん、實際余にとつては念佛は眞に永生の道であるか何うか大疑問だが併し余としては一切を如來に任かせて念佛して生きて行くより外には何所にも救の道を見出す事が出來ぬのだ色々な教も聞い

てみた色々事もやつてみた随分禁慾的にもやれば修養と言ふ事も企ててみた、けれども何うしても安住が得られぬ安住が出来る出来ぬのさわざでない、いよく自分を見てみると「淨土眞宗に歸すれども眞實の心はありがたく虚假不實の吾が身にて清淨の心も更らになし悪性更らに止め難し心は蛇蝎の如くなりだ、余の内の生活は全く動亂と不徹底と情意の盲闘と虚偽とに過ぎぬのだ若き日長きあたりに出入する頃は吾こそ眞面目なる宗教家と思ひて蛇蝎の如き余とも氣附かなんだが漸次冷靜に自己を觀照してみると實に惡魔だとも鬼だとも言ひやうのない奴だ而かも其の惡魔のやうな自分がやゝもすれば修道者のやうな宗教家のやうな信念の人のやうな佛教者のやうな外見を張るのだ、此の自分のありさまに一度氣附いてからと言ふものはもう偉らさうな事は思へなくなつてしまつた、あれ丈けの智者でありながら自ら愚痴の法然十惡の法然と仰つた事が始めて解つたやうな氣がする、余は僧侶ではない肉食妻帯在家止住だから、併し又普通の人でもない現在かう法衣を着けてゐるから、さうだ余は愚かなる禿だ、愚禿親鸞蛇蝎親鸞だ、然るに尊ひ事には余は念佛稱へる事に依つて實に如來の救濟を實驗するのだ、何故だか其の理窟は前にも言つた通り解らぬのだが念佛に依つて救はれる事は事實だ、若し余に念佛があたへられなかつたならば余は永久かくれ家を持ち得なかつたのだ、余は一念／＼に古き自己より新らしき念佛の自己に生きるのだこの上は念佛の教を信ずるとも捨てることもそは諸君の勝手だ「歎異鈔第二節を吾人が味ふたまゝを書いてみた」

C. 親鸞の信仰

前項に於て釋迦の大悟の解放に關して少しく論述する所あつたが茲に吾人の意見を披瀝しようと思ふ、諸君は吾人の此の企の大胆をせめてはならぬ、吾人の見る所を以てすれば釋迦の大悟の風光は一切萬有及自己本

來の面目が活如として彼の主觀に最高自覺として現はれ來つたとして其の所謂本來の面目とは「事々物々これ絶對」の活現であるとかう言ひたい、前に其の文を引いた如く有情非情同時成道と言つてゐる有情非情とは一切所有である同時成道とはこれ彼の主觀的事實にして事々物々これ絶對の眞底的自覺である彼は絶大なるエクスタシに入つたのだとも見られる、奇なる哉奇なる哉天地萬有悉く如來の智慧慈悲の相を具足すとも彼は見た、釋迦の修道が漸進的であつた事は前述の通りである、彼が金剛座に坐するに至る迄彼の内的坐活は随分多くの試練を経験して來てゐたにちがいない、故に吾人から見れば其の大なるエクスマシーが突然的に見わたる彼自身としては決して突發的創作でないと思ふ従つて悟其のものよりも彼の修道の道程そのものが吾人と已に距離があるのだと思ふ、

偕而話の方面をかへて吾人は親鸞の信仰について考へて行かう、彼の信仰は念佛成佛これ眞宗此の語につきてゐる思ふ、是を現代的の言葉で言へば嚴肅なる自我否定の刹那に創作されたる念佛の中に眞生命の悦樂と充實とを味つて生きて行くと此れである、眞宗の教説に耳を傾けた人であるならば此の吾人の見方が決して舊式でない事と妄でない事とを知るであらう、釋迦は高く遠ひ、けれども親鸞は底近い吾人は親鸞に關しては相當の自信と權威とを持つて立論し得ると信ずる、

自我否定は吾人の宗教に於ては徹底の第一歩である、けれども凡て宗教上の事はそれが概念の遊戯であつたら何の役にも立たぬ、自己否定も亦さうである、色々に思慮分別して自己否定を考へ出しそのやうな自己否定が何の役に立たう、眞なる自己否定は眞に赤裸なる自己にフルたる刹那にのみ中心的に産み出さる、吾のみ眞面目なる者の如く思ひ、友と交りて袂を着けかくて我が修養已に至れり、と思ひ時々たそひ來たる獸

性を深く他人にも自己自身にも秘して吾は清き子と思へるが如き人達は何んで自己否定の眞味がわからう、其等は凡てた目出度人達である、自己否定は赤裸なる自己にフレた時に始めて味はくる、自己は如何に見らるべきか、

禪は自己を佛と見た、日蓮は自己を上行菩薩と見た、傳教大師は「是に於てか愚が中の極愚狂が中の極狂塵禿の有情底下の凡夫最燈。上は諸佛に達し中は皇法に背き下は孝體に闕げたり」と見た耶蘇は神の子なりと見た、法然は痴愚の法然十惡の法然と見た、清澤滿之は「自己とは他なし絶對無限の妙用に乗託して任運に法爾に此現前の境遇に落在せるもの即是なり」と見た、トルストイも自己を神の子と見たにちがいない、かくて世界の眞面目なる人等は各々自己を如何に見たかを研究したならば實に意義と趣味とに富める事であらう、然らば親鸞は如何に自己を見たか、

諸君は已に前項に於て歎異鈔二節の話を出したあたりを讀んで彼が如何に自己を見たかに就て其の一斑を知つたであらう、彼は内觀内省努力精進生死解脫懊惱の極途に觀無量壽經下品下生の所に自己を見たのである、佛阿難及違提希に告げたまわく下品下生とは或は衆生有て不善の業たる五逆十惡を作りて諸の不善を具す此の如きの愚人惡業を以ての故に應さに惡道に墮し多却を經歷して苦を受くる事極りながらん此の如きの愚人命終る時に監んで善知識(師)の種々に安慰して爲めに妙法を説き教へて佛を念せしむるに遇はん此人苦に逼られて佛を念するに違あらず、善友告げて言く汝若し念する事能はずんば應さに無量壽佛と稱ふ可し、是の如く至心に聲をして絶わざらしめて十念を具足して南無阿彌陀佛と稱せしむ、佛名を稱するが故に念々の中に於て八十億劫の生死の罪をのぞく(中略)これを下品下生の者と名付く是を下輩生想と名付け第十六の觀

と名付く、

右は觀無量壽經の最後の二節である未だ何等宗教的苦惱を経験せぬ者にとつては何の事だかわからぬであらう、けれども何宗たるを問はず少しでも眞に自己信念確立の努力のために泣いた経験のある人ならば所々胸に釘打たるゝを感ずるであらう、鏡の前に立つ時其の鏡の表面をのみ見てゐたらいくら上等の鏡でも自己の姿は見わぬ、鏡の表面を通りこへて其の底に映つてゐる自己の婆に視線を注ぐ時始めて鏡は鏡たるの生命を見出すのである、是と等しく如何に含蓄に富む聖教も其の外面を見てゐた丈では何等の意義も與へぬ、眼光鋭く紙背を衝いて其所に現はされたる自己に當面しなければならぬ、故に聖教を繙くと言ふ事は却つて自己を讀むと言ふ事ではなければならぬ、親鸞は此の經文に接した時所謂此の如きの愚人とは正しく吾が事なりと驚いたのである、善き師種々に安慰して爲めに妙法を説き佛を念せしむるに遇はん此人苦に逼まられて佛を念するに違あらず、あゝ何んと言ふ深奥の文字であらう、先輩や友人や又は僧侶や牧師から神を信せよ佛を念せよと言はれて直ちに信じ得るものなら昔も今も求道者の苦闘はない、人生問題や其他種々の煩悶から發足して漸く信仰問題にフレ、かくて苦惱骨髓に徹する頃には、吾をして絶對的に信せしむる何物かを與へよ、吾が此心をして全分的に何物かに捧げしめよと血の叫喚を以て訴へ苦しむのであるが而かも神も佛も何うも全分的に信仰の對照となり得ぬ此所に最後の關門がありはせぬか、此の關門逃避した群がたゞはせぬか彼といと愉快げなる信者たちの群はそれではなからうか、聞く所に依れば獨歩氏が病漸くあらたまつた時中心の苦痛に耐わられないで救ひを求めた、もと彼は教會にぞくしてゐた縁から〇〇と言ふ牧師が來た、牧師は彼に祈りなさい神は必ず來つて救ふと言つた、所が獨歩氏は言つた、「今の余にはもはや祈る力がない、此のま

まを救ふ親はゐないか」「午後三時獨歩烈しく泣くとしてある、これである、殊に現代人は幻滅時代の思想の流を汲んで眞に祈る方さへ湧いて來ぬのである、七百年前の親鸞もそれであつた、彼とても早くから如來に就いては考へもし求めもし研究もし信じようと努力もしたのであつたが赤裸なる自己に觸れなかつたが故に何うしても安住する事が出来なかつたのである、然るに觀經下品下生の所の此の如きの愚人只苦しさの余りにも念佛するものは永生を得ると言ふ教訓の中に彼自身の自己を見出したのであつた其所に彼は更生を得たのである、全我的念佛を創作し得たのであつた、彼は自己を正しく此の愚人と見たのである、かくて彼は一念／＼に赤裸なる自己に當面しては新らしく念佛を創作して其の創作されたる念佛の中に自己と如來との融合を經驗したのであつた、生の充實は親鸞に於て新らしく創作される念佛に依つて味はふるゝ事實であつた、

於是吾人は釋迦の悟と親鸞の信との風光について少しく比較的に考へてみたいと思ふ、釋迦の宗教は萬有及自己の眞底に佛性の光輝を認めた所のもので親鸞の信は唯一にして赤裸なる自己を否定したる眞底に念佛を創作し其創作されたる念佛の中に於て如來の光明を經驗した、所のものであつた、これを少しく常識的に言へば釋迦は汎神のであり萬有神教的であり親鸞は二元であり一神教的であると言へる、親鸞は一切を排して赤裸なる自己と如來とを見た、彼は一切を否定して如來に突啗し如來は一切を見捨てゝ親鸞一人に向つて突進した「よく／＼按ずる如來は吾一人のためなりけり」と彼は言つてゐる、一見すれば釋迦は一元のであり親鸞は二元のである、(此等關しては大に論ずる餘地があるが後日にする、それは耶蘇教と眞宗と言ふやうな問題になる)。

釋迦入滅より親鸞に至る二千餘間佛教的偉人は多く出たがやゝもすると、釋迦の悟を模倣せんとして赤裸な

る自己を見る事を忘れた、然るに親鸞法然善導の諸師は著るしく趣を異にする、彼等は釋迦の模倣も先徳の模倣も修道の最後とはしなかつた、其所に親鸞の宗教改革の一面がある、そして一切を否定して如來に直進した所に他の一面がある、前者を消極的とすれば後者は正しく宗教改革の積極的方面である、又肉食妻帯在家止住も佛教史上に於ける改革の大なるものである、原始佛教時代の婦人觀はやくもすると冷酷であり人性觀は決して解放的でなかつた、釋迦在世當時の佛教々團が如何に婦人を持てあましたか面白い問題である、然るに親鸞は公々然と妻を持ち子を産ませ肉を食つた、そして寺院生活を捨てて在家止住であつた、單に外形上から見ても大改革であるが而かも其が彼の信仰から來たものであるを知る時實に彼の改革は内容的のものであるのに驚く、彼は一切の佛教々理や禁慾道德や教祖や先徳を捨てて如來に突進したのである、其の突進の一念に一切が許されたので彼は再び自己を肯定し性を解放したのである、親鸞の宗教改革は是又大に研究すべき面白い問題であり又そは所謂現代と密接な交渉を持つてゐる、

D. 親鸞の憧憬

吾人は近來東都に於ける種々の人々の「近代思想を通して見た親鸞」の發表に接する毎に如何にも親鸞は低く近くある事を思ひて彼に對する憧憬の念を高めるのである、同じく親鸞を憧憬すると言つても人々に依つて種々に差がある、吾人は近來多くの人々と交際する事を得て彼等が如何に親鸞を見てゐるかといふ興味ある問題に逢着する、が大別すると親鸞が赤裸々に自己を發表してゐる事に非常な親しみを感じ其所に憧憬があると言ふのと、其の親しみの念が高調て何うしても彼を只の人間と見る事が出來ぬ其所の佛の權化としての憧憬があると言ふのである、吾人は其の何れも眞面目なる

告白であると思ふ、今少し此等の人々の考を説明すれば、古來幾多の宗教的偉人は東西に出た、併し彼等は凡て高壇に立つて我等を羊の如く驅り立てやうとした、若し我等に對する理解と同情とが彼等にある事を我等が認め得たならば我等は悦んで羊となつて驅り立てられたかも知れぬ。けれども實際に於て彼等の言説彼等の指導の態度の中にそれを認める事が出来なかつた、然るに親鸞は決して高壇には立たなかつた、彼は出家さへしなかつた、只自己を泣いた、赤裸な自己にフレた、そして其所に如來の救濟を實驗した、單にそれだけである、けれども我等は彼親鸞の此の行き方の上に我等自身の宗教を見出す、親鸞は高く尊きが故にでなく低く近くて而かも如來の救濟を實驗してゐるが故に彼に行くのであるとかうである、そして後者の人々が言ふ所は、前者の言ふ所は實に同感であるが我等は尙一步進んで吾等の信念の確實なるに驚けば驚く程第一歩者である親鸞の人格に驚かざるを得ぬ、單に人間と言ふ事が彼の全体ではなくして何んだか如來の權化だと思へてならぬ無論色々理窟をつけてさうするわけではないが何うもそんな氣がしてならぬと言ふのである

前者の考は青年者に多く後者の考は比較的老年者に多い、吾人が親鸞に捧げる憧憬の念の中にも前二様の心持は何れもあるが前者の傾向に富んでゐる、が特に言はなければならぬのは、彼が念佛の中に如來の救濟を實驗したと言ふ事である、只自己に困りはたと言ふ丈けならぬ、何も吾人は彼にまで行かなくつとも現代文學者の中に沈痛なる者を見出す事が出来る、時代を異にする親鸞より其の方がむしろ吾人に近いのである、吾人が彼に行く所以のものは單に彼が赤裸なる自己にフレたと言ふに止まらずして其の赤裸なる自己の上に如來の救濟を實驗した所にある、無論たとひ彼が此の實驗を告白しても赤裸の自己にフレた痛ましい道程を傳へなかつたならば吾人は彼には行かぬさればとて又赤裸なる自己にフレたと言ふのみで念佛の中に如來の攝取

を實驗しなかつたならば吾人は彼には行かぬ、實に彼には此の兩面あるが故に吾人は彼に行く、多くの聖者は大抵一面しか残らぬ、従つて吾人が彼に近づく所以を知らぬのである、然るに親鸞に於ては此の兩面があるので吾人の憧憬の對照となるのである、

尙親鸞研究上發表すべき多くを略して茲に項を改めて「吾人」の一端を發表するであらう、實際は吾人が現代思想からと及び佛敎からと學び得たる世界觀人生觀宇宙觀藝術觀宗教觀と言ふやうな事を出來るだけ書いて又相當な問題も提出する考へであつたが非常な勞力と時間とを此上要するので此度は止した、そして吾人の極めて一端でも見て頂く考へから最近三年間吾人が友人や他の雜誌に送つた舊稿の二三を次に掲げやう、只何れの點に於ても吾人自身の思想は常に移り變つて行くと云ふ事實を肯定して貰ひたい此次に同じ問題で諸君に接する時吾人は今と全く反對の態度に出なければならぬかも知れぬのである、

第五章 吾人の書簡

a. 人生觀に苦しむ一友に

先月中旬でした、私は二度續けて君を訪問したが二度ながら君は不在でした、今月初めステーションで御目にかゝたけれども僕は出發の際だし君は友達と連立つてゐたものだから話す機會は遂に得なかつて残念な事であつた、

君が色々な事情に逼られて遂に學校も中途に止め今の如く縣廳の一小吏となつたに就て僕は同情の念に耐ぬのだとしてあれだけ樂觀的であつた君が近來著しく變つたと言ふ事は何うしても僕にペンを持たせるのだ僕が嘗て人生問題にフレて苦しみぬいてゐた頃君は僕に運動をすゝめたり散歩をすゝめたりしてくれたがあ

の頃の事を君は覚えてゐるか、君も知てる通り僕は子供の時から讀書好きで早くから色々な本をよんだ又一方ではあんなに禪寺に近づいてゐたものだから何時とはなしに佛教思想が僕の若い頭に沁み來んで來た其上僕は理智の人であると共に感情の人である丈けに種々の疑問を凡ての物に對して抱きながら一方では頗ぶる耽美的で美文だとか詩だとか自然への憧憬が強かつた、此等の原因から僕はついで例の病氣にかゝつたのだ人生の疑問に悶々出したのだ、近來先輩の言を聞けば、何のための人生と言ふ事は己に問題でない、如何にして生命にフルるかど問題であるとの事であるけれども其の頃の僕には何のための人生ぞやと言ふ事が問題であつた、深い意味ある問題であると思はれた、僕は却々功名心が強つたから中學卒業後は何うする其の後は何うするとあれからあれへと出來る丈け將來美しく胸中に築いた、けれども其れが築かれた極點は何うかがラリとくずれて只一途に物足りない感が潮のやうに湧いてくる計りださうすると僕はもう單なる功名心の奴となつてゐる事が出來なくなつて何うしても人生の眞意義をつきとめなくつては生きてたれなくなつたのだ「君は神經病ではないか」と其頃君は僕に言つたが併しさう言はれた僕は何れ丈け悲しかつたか君と同様に多くの先輩が「そんな事を若い頭で考へたつてわかるものか只勉強してたればよいのだ」と言つた、これが忠告や又は指導であらうか何んと言ふ冷淡なる理解なき言葉であつたらう、僕とても人生の解決などはとても出來まいとは自分ながら思つてゐたが矢張考へずにはたれなかつたではないか其所に眞の悲しさがあつただ人生の眞意義はこれだと言ふやうな何物か、確立されなかつては何うしても生きてたれないやうな氣がしたのだ、君が運動や散歩をすゝめてくれた其の親切はわかつてゐたけれども君には何故人生が問題でないだらうかと不思議に腹立たしかつた、其の當時を懷へば今更ながら泣ける兩親は心配し先生は氣遣い友人は種

々に誤解する僕は私かに自殺さへ企てた僕の心は陰氣になつて何を見ても涙が出る無意味な生活を只ひきづられるやうに生きて行く事が如何にも惨しい、其上僕は寺に近づいてゐたのだから死と言ふものにも僅かにフレてゐた、

其頃君は樂觀家であつた僕等のクラスで僕と君とは何の點に於ても衆目の中心であつたが二人は突然兩極端になつた何う言ふものか僕が悲觀すればする程事實に於て君は樂觀家になつたやうである僕は樂觀してゐる人間なんて馬鹿か或は強ひて中心の問題をかくしてゐる連中だと思つてゐた君は樂觀家でなくつては人生の勝利者にはならぬとも言つた

が近來になつて君は周圍の事情から追ひ立てられて遂に人生と言ふ事を問題にしなければならなくなつた君が先日の手紙にも言つてる通り「僕の近來の生活は僕の自由意志に依る生活でなくして他人に餘儀なく強ひられたる生活だ是が運命と言ふものかも知れぬ。けれども運命の權威にのみ支配さるゝ生活は何のための生活だ屍のやうな生ではないか此んな生活状態にあつても尙生きてたらねばならぬだらうか、僕は何のために生きると言ふ生活の標的が欲しい僕の生活をして其の標的のための努力の生活たらしめたい。兄が一昨年頃切りに問題にしてゐた人生の眞意義と言ふ事が僕の此生活の標的と言ふのと同じ事だつたかとも思へる、が兄はやくもすれば抽象的議論に入るを常としたが僕は今少し具體的を求め、とにかく此のまゝでは不愉快で不安定でたまらぬ、何所にか其の標的を求めなくては運命に安住する事は出来ぬ今にして漸く一昨年當時の兄を思ふ兄は何うしても頭が哲學的に出来てゐるだけに早く自發的に此の問題にフレたのだね、兄の過去の經驗から何とか言つてくれんか。でなければ實際僕は何うなるかわからないよ」君も遂にフレたのだ僕は同

情する、そして運動や散歩を進める勇氣は持たぬ又單に職業に忠實なれと言ふ様な理解なき言葉を呈する勇氣もない、それかと言つて別に君に與ふ可き解決も持たぬ僕も其後種々の本を讀み考へ煩悶し先輩とも議論もしたが結極人生の眞意義などつかめるものではなかつた君の所謂生活の標的と言ふ事が果して僕の問題にした所と等しいか何うか問題であるけれども遂に君も僕と同じ結果に終はるであらう、人生は活動なりとか功名榮達なりとか人格の發展だとか人生は無解決なりとか何んだかんだと言つて其が人生の眞意義であり生活の標的でもあるかの如く世の中の人達が書いたり言つたりするけれども深く嚴肅に行けば行程問題は錯雜して遂にはかなくも荒廢した無解決の自己を見出す丈けである、人生の眞意義或は生活の標的を直接の問題として人生研究の歩武を進める時吾人の足は何時も不可解の谷底をのみ求めて歩いてゐる是は吾人の群の實見であり舊思想から解放されたるものの經驗である、が君よく聞いてくれ給へ、人間は人生の眞意義とか生活の標的とかをのみ何時迄も全体の問題としなければならぬ程に不自由な國定的な者に作られてはゐないのだ換言すれば求めてゐる所の人生の眞意義或は生活の標的と言ふが如き問題のみの對照として自己人生を何時迄も見なければならぬ程に人間の内面生活は固定されてはゐないのだ又其んなに單純ではあり得ないのだ全じくこれ自己人生であるが其を如何なる問題の對照としてみるか、其の態度の上に何うしてもまぬかれぬ聖い推移があるのだ此の推移は實に人生に與へられたる福音であり人文の建設者である、前述の如く「何のための自己人生ぞや」と言ふ事は今日尙ほ僕に何等の解決もない、而かも「何のための自己人生ぞや」と言ふ問題の對照として自己人生を見る外に何等の態度も僕に許されぬとしたら僕は實に十年一日の如く終始唯一の問題のために血の涙を絞らねばならぬではないか然るに前述の如く對照は全じ自己人生でもそれを對照

として生れる問題が推移するのだをして其の推移が決して不眞面目な又は妥協的なものではないのだ、實際それでこそ僕は今日迄生きて来られたのだ、

然らば問題は如何に推移したか人生の眞意義と言ふ問題以外それは随分多くの問題が新らしく起つたをして其等は矢張人生觀上の諸問題と言へる、其の諸問題は僕の内面で烈しく荒れ狂ふて僕は何時も内生活の破綻にないた、かくする間に問題は人生問題から漸次所謂信仰問題なるものに進んだ、信仰問題の對照として自己人生を見なければならぬやうになつたのだ、此所をよく考へてみてくれ玉へ信仰問題の對照として自己人生を見ると言ふ事は自己が先づ宗教を求めたと言ふ事である、そして宗教と言ふ鏡の前に立つてみれば今迄氣附かなかつた自己の如實相が始めてアリ／＼と見えるではないか、自己には生と死とある、一步理想の天國に昇らんとするかと思へば一步は暗黒を慕ふて地獄に降らんとして自我分列の狂瀾は實にたとへやうもない、靈肉の烈しき鬭争、絶對孤獨の悲哀曰く何何何、實に宗教と言ふ大圓鏡にうつた自己相を見て其所に如何にかして眞に死するの道眞に生くるの道を追求しなければならぬやうになつて其所に信仰問題なる者が起つたのだ、そして今日では自己は是永遠の求道者なる事が大分徹底して來て念佛稱へながら可成世間常識者流の狭い行きつまつた生活からのがれて信念の廣い世に充實の生を味ふ事が出來てくるのだ、が信仰上の話になると何うしても直接面談でなければ満足出來ぬから後日に其の機を待たう、

僕がかう推し移つたのは子供の時から寺院や教會に接近したからと言ふ關係もあらうが最近の僕の考では如何なる人でも若し其人が眞實眞面目であるならば必ず其人は信仰問題に迄進まねばならぬと思ふ僕が信仰だとか宗教だとか言ふのは別に佛教とか耶教とかの具體的已成宗教をのみ指すのではない無宗教と言ふ宗教で

もよい近來新聞で見るやうな科學宗でもよい無我愛と言ふ宗教でもよい哲學宗と言ふがあるならばそれでもよい、とにかく宗教と言ふ言葉に依つて現はされる或物であるそれは全我的創作であり創造の藝術である、故に單なる科學の對照として自己人生を見た者も藝術や哲學や倫理道德の對照として自己人生を見たものもそれが眞に徹底する前X時に於てそれは信仰問題の對照として自己人生を見ると言ふ事にまで推移せねばならぬ思ふ、

それで君にすゝめるのは是から宗教を聞いてみたまへと言ふ事だ君に、信仰問題として自己人生を見ると言ふ事が出来るやうになつたならば生活の標的など君を苦しめる問題でもなんでもなくなる、そして先日も言つた如く郷里山口に於ける僕は禪にのみ走つてゐたが熊本に来て以來始めて眞宗の宗教的偉大に感じて今は全く親鸞憧憬者となつてしまつた、若し君が從來の如く僕を兄と思つて僕の言を入れるを拒まぬなら浩浩洞から出る物でもまづ讀んでみたまへ(下略)

b. 人生解決と信仰生活と言ふ事につきて一友に與へし文

今日は日曜ですから少し朝寢をしました、昨夜は西行先生御宅の土曜會に行きまして夜十二時過くるまでも信仰上の話を聞いてゐましたので大變つかれて歸りましたからグツスリねてしまつた、只今朝食をすまして書齋に来てみると机の上に貴女の手紙が乗つてゐる、何時もながらの鋭い筆には全く恐れ入ります、「近來の私は全く自暴自棄の姿です人生など幾程考へたつて到底解決のつくものではなし信仰上の御話も聞いてゐる時には何んだか力にフレたかの如く思はれますけれども又直ぐ色々の疑問が出て來たり又は疑問と言ふ程の事はなくつとも何んだか宗教など言ふものが無意味に思はれて來ます。つい先日もある友にさう申しまし

だ「近來の私には佛教は何んでもない」と實際何時の頃よりか私は如來に親しみを感せぬやうになりました先日の御手紙はたしかに私にとつては意味あるものと思ひましたが余りむつかしくつて解る事も解らなくなつてしまひますわ、それから先々日の御手紙を返してくれとの事ですが實は東京に居る私の友が此度兄さんと共に北海道に渡ると申して來たのであの御手紙をかたみに上げましたもう仕方がありませんわ」沈酷で懷疑的で其の平凡で信順的な貴女にはもう慣れてゐるから自暴自棄になつたとか何んとか言つても僕は別に驚きはせぬ、精神生活の道程に一步歩み出した者が苦しみの余り幾度か自暴自棄にならむとするのも別に珍らしく亦危険でもない、己に一度靈的生活の戦の野に出たものは自暴自棄にならうとしてみなされるものでない、それは徒勞である寧ろ正直に言へば自棄になり得ない事が却つて苦痛であるかも知れぬ。いつその事もかも打忘れて自棄荒廢の生活に入つてしまいたいと思ふ事が却つて自棄になり得ぬ反証であるかも知れぬ、又何時の頃よりか如來に親しみを感せぬやうになつたと言ふも何も今更らしく言ふに及ばぬ事、宗教と言へばすぐに如來だとか神だとか言ふ、甚だしきに至つては禪の如きは直接神とか如來とかをかつぎ出さぬものだから禪は宗教ではないかの如く言ふ人さねゐる。けれども吾人の宗教はそんなものではない。如來が何んだ創造主がなんだ、何うしても如來とか神とか言ふ概念を肯定せねばならぬのが宗教なら吾等は何の未練もなく宗教と別れやう、神の實在の證明だとか如來が何うだといくら僧侶牧師がさわいでもそれは牽強附會でさなくば單なる抽象感念にすぎぬのだ、吾等は頭で漸く考へ出したやうな神佛に自己の救濟をまかせて平氣でゴマカシてゐられる程世故なれてゐない事を感謝する、世の御上手な傳道師や陽氣愉快げなる信者たちの群の中には信仰上の破綻に出合ふ毎に無理に如來や神の感念を頭から絞り出したり又はかくて絞り出されたる話

を他人から聞いたもして平氣で神や如來の實在を高唱してゐるのだ吾等にはそんなためてたい事は出來ぬ、尤も信仰上苦痛動亂の極「仕方はない、もう一切を如來にまかせろ」と言ふが如き感念が突然胸中に湧き來つたために胸中の迷亂忽ちにして去ると言ふが如きは吾等とても其の經驗それ自身の價値をみとめる、併し此の場合神や如來の實在の証明に迄走らねばならぬ必要は寸分もない、此の靈的事實が消ね去つた時に於ては平靜なる本來の自己に立ち歸へる程に吾等は正直でなければならぬ、妙な芝居をしたり、ありがたさうな眞似をしたり、神や如來をかつき出す事に依つて無暗矢鱈に人を驚かしてはいけぬ、吾等が日頃無神的であると言つてゐるのは何も無神論でなければならぬと言ふ根據に立つて出張してゐるわけのものではない、只自己中心の卒直なる表白にすぎぬのだ何う考へたつて考へる事に依つて眞實權威ある如來にまで到達し得ぬのが吾等の眞實なるが故にしか言ふのだ、神が實在せぬものなら人間は勝手に神を作るべしと或人は言つた、成程さうだ、けれどもこの味は神を否定せざるを得なかつた苦い經驗のある人でなくつてはわからぬ、貴女が如來に親しみを感せぬやうになつたと言ふ事は正直にそして大膽になつた事だと僕は思ふ従つて少しも驚かぬ、舊い教權派の人達は外道の如く思ふのであらうが時代はもう昔に轉換してゐる、只貴女に言ひたいのは「人生の解決」と言ふ事が又してもく貴女の口から出る事だ、

先日もあれ丈けくごく話した如く信念の生活と言ふ事は所謂解決の生活と言ふ事ではない、貴女は人生の眞意義だとか或ひは人生觀上の一つの主義とか言ふ或る確立せる感念に依つて一切の自己生活を統御して其所に何等の破綻も動亂もなき簡明直切旗色鮮明なる生活を人生解決と言ひそんな生活に入りたいと思つてゐるのだらう、如斯獨立感念の製作を人生解決と言つてゐるのだらう、けれどもそれは自己觀照に於て著しく幼稚

であるからだ、貴女が長い間耶蘇教に行つてゐながら遂に失敗したのもそれではなかつたか、神と言ふ一つの獨立感念に依つて一切の自己生活を統御しやうとして遂に失敗したのではないか、若し貴女の空想が眞實徹底的に吾等普通人にでも容易に實現されるものであつたらあれ丈けの精神苦闘は此の人生にしろされなかつたであらう、と同時に人生の複雑は味はなくなつたであらう、知的生活の破綻情意生活の動亂かくて一切の自己生活を最も嚴肅に觀照し來る時一つの獨立感念に依つて全生活を統御せんとする事の如何に徒勞であり不自由であり生の進展を妨げ生の眞價をきづいてくる者であるかに驚くであらう、けれども或る精神過程に於て人生々活に對する倦怠氣分と共に斯の如き要求の起り來たるは事實にして又それ相當價值ある事でもある人は此の過程をも通過して始めて信仰生活へ更入し得るが故である、

吾人の所謂信念の生活とは決して如上の解決生活を意味するものではない、初學者は何か獨立觀念に依つて全生活を統御する事が信仰生活の上々たるものゝ如く思ふであらう、けれどもそれは未だ實際に精神苦闘を経験せざる者の理想論である、一切の生活を觀照する時自己生活は如何に辯解するも必竟不統一不徹底不安定極まるものにすぎぬ自己生活の一部を見たり又は安價なる自己辯護に瞞着されたりするものゝ自己生活には何所かにそれ相當の統一があり徹底があるかも知れぬ、けれども吾等はそんな所は己に通過して來た、人間は天に向はんとするが故に野獸ではない併し獸性を有するが故に神ではない、とは實に何うする事も出來ぬ事實である、此の事實に當面したる人は即赤裸の自己にフレたる人である、かゝる人には安價な妥協や盲信は出來ぬ、それは幾度か信仰や解決と思つた所のものが遂にきなきや自己辯解にすぎなかつたとして其んな門前の兒戲の想像だにも及ばぬ奥の院に神ならず野獸ならぬ人間が巢ふてゐる事に當面してゐるからであ

る、親鸞に於ては此の奥の院の人間こそ生死流轉の御本尊であつた、吾等にとつては動亂と昏迷との本体であり且つ生死流轉の本体である、此の人生のどん底に衝き當つた時吾等は始めて全我的念佛を経験する此の念佛は如來とか言ふ救主を頭の中にゑがいての芝居ではない、殆んど空虚皆無の世界に向つて中心的に叫ばれる、此所に辛うじて吾等は否定されたる自己の復活更生を経験する、此の復活そのものが佛の救濟であるとして此の復活は決して一度限りのものでなく常に經驗される此の復活を経験する即全我的念佛に依つて更生する生活が吾等の所謂信仰生活である、

一度復活したからとか自分には己に一度入信の事實があつたからとてはや愉快げなる信者の仲間入をしてゐるのは吾等の眼から見れば御目出度人達である吾等の宗教は決して已成のものたるを許さぬ吾等の進む可き道は已成でない常に新らしく開拓し新らしく創作されたる宗教即念佛に生きて行く可きである、其所に嚴肅なる信仰生活がある、親鸞の信仰もそれであつた、人生のどん底にけたとされた時其の時全我的念佛に依つて更生し更らに又更生を経験したのであつた、是を彼は「念佛申さんと思ひ立つ心の起る時即攝取不捨の利益にあづかる」と言つてゐる、實に信仰生活とは靈界の破産者が其の極限に立つた刹那、最後の大飛躍である所の念佛に生きて行く事である、此の念佛に依つて突破建設の充實味を悦樂する生活である、又其の刹那／＼がいくら斷續しようともかまはぬ一度起つて次に起るまで幾十時間が過されやうともかまわぬそれは客觀的にはいくら長くあらうとも主觀的には零に等しいからである、

要するに君の所謂解決生活とは空想である、そして人生の解決と言はる可きやうな一つの獨立感念を有する生活が果して眞に徹底せるものと生活であるか何うか疑問である、又解決生活の要求は未だ心靈上の破産に

迄到達せぬ者の中心苦闘であるを以て吾等の所謂信念に生きる生活とは心靈上の破産者が如何に努力しても追求しても何者にも妥協し得ざる懊惱の最后念に於て辛うじて大飛躍を経験する事に依つて生きて行く生活である故に彼の生活は内觀の初一念の刹那に於ける自覺は永遠の求道者としての自己を其の内袍とし其の次の刹那に於ては「吾は佛なり」を其の内容とする、

凡て如上の論明は決して常識的な一般論や客觀的態度よりの遊戯でない事、眞に吾等の内生活の事實なる事を貴女によく知つて頂かねばならぬ、(下略)

c. 強き生活者と題して友へ、

信念の生活に於て客觀化されたる自己は凡て嚴肅に否定されざるを得ぬ、復活とか更生とか一念歸命とか法悦とか斯の如きは凡て我が中心に於て當さに經驗創作されんとする刹那にのみ甚大の意義と使命とを有するものである、其の刹那が已に過去に屬し經驗されたる復活や念佛がふり歸つて見られたる時それは已に無意味なる屍となる即ち其所に所謂否定が生れるのである、過去に經驗されたる一切の念佛は現在刹那の自己の救濟とはならぬ、況んや客觀の創造主や如來が何にならう、過去に念佛したるが故に吾己に助かれりと思ふが如きは或る意味に於ける偶像思想の怨念である己に一度復活を経験せるが故に吾は永遠に助かれりと言ふ者あらばそれは未だ自己生活の眞底に味到せざる余の所謂愉快げなる信者達である、念佛と言ふも復活と言ふも舊人生客觀の人生已完の人生の最後念に立ちて新人生主觀の人生未完の人生に當さに一歩歩み出さんとせる刹那の全我的改造であり更生の表現である、自己否定の極限に於て中心より突發的に湧き來たる最高自覺である實に眞新生命の誕生である而してそれは刹那に於てのみ權威である、故に刹那／＼の念佛以外に客觀界に

神や佛を必要としない、信者と云へば何時でもオ、神よオ、佛よと言ふ者なりと思ふは至らざるの甚だしき若輩の言である、現代の小哲學者の信仰は單なる客觀的實在を何等必要とせぬ事は思想界の童子尙ほこれよく知れる所の事實である、現代の幻滅又は徹底せる幻滅を意味する偶像破壊が如何なる點まで進んでゐるかは今少し活きた眼を開いて吾れ人共に見たいものである、神や佛と言ふ偶像、たとへそれが客觀界にまつられてあるにしても或は又吾人心想中にまつられてあるにしてもかゝる偶像は寧ろ信念の常識的生活者流にのみ必要であつて眞劍なる生活者には必要でない、

吾人は斯くて實現されたる念佛に依つて新らしき自己生活に轉入し次の刹那に於て再び新らしき念佛に依つて復活する吾人の救濟即宗教的事實は其の刹那に於てのみ絶對の事實であり權威である、而して其の刹那を一步出で第三者としての自己が我が主觀に新生し來たる時忽ち永久の求道者となる「法然は實に多くの念佛を稱へたが而かも一度も念佛しなかつた」とは曾我量深師の言である、彼法然は稱へたる念佛を念々に葬り常に新らしき念佛を創作して其所に生の進展(宗教的なる)を味つたのである、

愉快げなる信者達の生活は是を嚴肅に見る時情氣滿々たる外道行者の生活である何宗にせよ何教にせよ眞理は事實である、事實の外に空想の宗教はあつても生命の宗教はない、吾人の實驗しつゝある刹那充實の信仰は實に強き勝利の生活の基調である、偶像破壊者の宗教である、自己獨り内觀する時眞に強みを感ずる生活である、(下略)